

児童総会がありました

2月17日(水)に児童総会が行われました。児童総会は、年に2度行われます。1回目の児童総会は、5月7日(木)に行われました。そこでは、本年度のテーマや活動方針が決まりました。今年度のテーマは、「輝け北っ子! 青空のような広い心をもとう!」です。このテーマのもと、「あおいそら運動」として5つの具体的な活動の柱を掲げ、児童会本部役員を中心に楽しい学校作りに取り組んできました。

- あ 明るく楽しく笑顔ですごそう
- お 大きい声であいさつをしよう
- い いいことをたくさんしよう
- そ 外でたくさん遊ぼう
- ら 楽しめず、たくさん働こう

総会ではこの5つの活動について、次のような順に話し合いが行われます。例えば、「明るく楽しく笑顔ですごそう」活動では、まず本部としての考えが示されます。次に各クラスから意見が出されます。

①本部の考え

- ・今年度はペアタイムや手紙交かんなどのペアの活動をしてみました。このようなさまざまな活動を通して北っ子がたくさんの人とふれあったり、笑顔になれたので良い活動が出来ました。

②各クラスから出された主な意見

- ・私たちのクラスでは、みんなで頑張って達成することが出来ました。
- ・ぼくたちのクラスでは、ペア活動も良いけど、縦割りでする方が友だちの輪が広がるのもっと良い、という意見がでました。
- ・ぼくたちのクラスでは、この活動を通して友だちとのきずなを深めることが出来ました。

児童総会の中で特に感心したのは、(教頭先生も終わりの講評で述べていたのですが)「大きな声であいさつしよう」活動の時です。本部、各クラスからの意見が出された後、本部から逆に参加者に提案しました。

「『大きな声であいさつしよう』の取り組みで、もっと良い取り組みになるようなアイデアをお願いします。各クラスで3分間話し合ってください。」

と投げかけました。すると直ぐにクラス毎に輪になり、リーダーを中心に話し合いました。話し合いの様子を見て(3分間では終わらないかと判断した)本部役員が「3分間過ぎました。もう少し時間を延長してもらいたいクラスは手を挙げて下さい。」と指示を出します。各クラスは直ぐに反応します。熱心な話し合いの後、各クラスから色々なアイデアが出されました。第1回目の児童総会と比べ、本部役員の成長と共に、北小児童全体の成長が感じられた児童総会でした。

委員会活動の報告



新児童会役員あいさつ



子どもの夢と親の期待

私たち親は、わが子にどのような生き方を望んでいるのでしょうか。多くの保護者の方々は、わが子がまじめに生き、人様に迷惑をかけることなく、社会の一員として誠実に生きてもらいたい、そんな願いを持っています。わが子が立身出世し高い地位や名声を得ること、事業で成功し大金持ちになること、確かに嬉しいことですが、そのようなことはあまり期待していないように思います。

勿論、子ども自身が持つ夢は別です。政治家として将来は一国の首相になりたい。スポーツ選手として将来、石川遼選手や横峯さくら選手のようなプロゴルファーになりたい。大きな会社を創り、ビルゲイツのような世界一の大金持ちになりたい。勉強してノーベル賞をもらえるような偉大な科学者になりたい。そのような大きな夢を持つことは素晴らしいことですし、そのような夢の実現に向かい努力することは大変意義あることだと思います。(夢をつかむ10の法則については学校便り35号の裏面で紹介しました)

ですが親は、わが子がある程度の年齢になると、わが子の能力を冷静に見ることが出来るようになります。言い古されたことばですが、「十歳の時に神童とまで言われたわが子も、二十歳を過ぎるとただの人」となっているのが現実でしょう。そのような様子を見て、わが子に大それた望みを託すのではなく、分相応の生き方を望み、ささやかな幸せを願うのは親として自然の感情といえるのだと思います。

困ったことに、現在の社会は、チャンスは誰にも平等に与えられている、という前提に立っています。そのため激しい競争に勝ち抜き、富や名声を手に入れた者を「勝ち組」として賛辞し、日の当たらない場所にいる人をややもすると軽視する風潮があります。

しかし、果たしてそうでしょうか。わが国には昔から「かごに乗る人、担ぐ人、そのまたわらじを造る人」ということばがあります。社会は様々な職種の人々がそれぞれの役目を誠実にやることで成り立っていることをいったことばです。職業に貴賤はなく、どのような職業も尊く、職種で尊敬を得るのではなく、その仕事をどれだけ責任を持ち行うかで尊敬されてきました。このような、わが国の良き伝統が失われつつある、と感じるのは私だけでしょうか。かごに乗る人だけを認める社会は偏った社会といえます。

現代のような目まぐるしく変化する社会では、目先の器用さを発揮する人を「才人」として認め、黙々と技を磨く職人氣質を「融通の利かない人」「面白みの少ない人」と低く評価する傾向があります。確かに、親方から弟子へと額に汗しながら作業し、体で教え込まれながら技や技術を会得する徒弟制度は、前近代的な雰囲気があり現代の若者が馴染めないのも事実です。ですが一方では、そのような生活の中で技を磨くのを苦にせず、むしろ、そのような世界で生きること喜びを見いだす若者がいることも事実なのです。このような若者は、一昔前ならば職人として尊敬されたものを、現代社会では、世渡り下手で自己表現が不得手な彼等は、日の当たる場所を歩めず屈折した感情を抱いている場合があります。

では、今の日本に彼等の居場所はないのでしょうか。そんなことはありません。社会がどのように変化しようとも、誠実に仕事に打ち込み、黙々と技を磨く姿は尊いものです。社会の表面的な風潮だけを見て、彼等が自分に居場所がない、と感じたとしたら、それは本人にとって不幸なことですし、社会的にも国家的にも大きな損失です。

わが国が世界に誇る「物づくりの技・技術」が失われつつあるのは、実はこのような社会風潮と関係するのではないのでしょうか。私たちはまずはわが子や周りの人々に対し、どんな職業を選ぼうとも、その仕事を誠実にやる姿をこの上なく尊い姿、と認めたいものです。そのことが、わが国が世界に誇る「物づくりの心」を呼び起こすことになるのでしょうか。そうです、社会の片隅でもいいのです。その一隅をひっそりと照らす者こそ国宝なのですから。(一隅を照らす者は国宝なり)